

インドネシア人の名前

高 殿 良 博

I. はじめに

インドネシア人には苗字がない。本人だけに与えられた個人名だけである。島村修治著「世界の姓名」(講談社)によると、現在も家の名すなわち姓にあたるものをもたない民族の例としてビルマ、大部分のインドネシア人とマレーシア人、多数のアフガニスタン人、相当数のパキスタン人およびラオス人があげられている。インドネシアの場合、父系親族集団が継承する氏族名(マルガ)を持つ北スマトラのバタック族、そして、キリスト教化した北スラウェシのミナハサ族、マルクのアンボ、およびインドネシア名に改新しないで中国名を名乗る一部華人などを除いて、イスラム教を信仰する一般大衆の大半が同一血族の子孫を表示する家名、いわゆる姓を持たないまま社会生活を営んでいる。その数は一億人をはるかに上回っており、従ってインドネシアは世界でも最大規模の苗字のない命名の制度を持つ国といえる。

ところで、人の命名は、その人を他者と区別し、世の中における位置づけを行う働きをするが、本人と名前との間には直接の結びつきはなく、任意の恣意的な関係にすぎない。しかし、実際は名前に対する人々の関心は、名を実在の人そのものと等しいと見ており、「姓名判断」など名前そのものが占いの対象になるという事実がそれを如実に語っている。名づけの背後

には当人の個体識別のための表示に留らず、こうあれかしと乞い願う命名者の願望がこめられている。こうした願望を表現するためには、その文化が持つ総語彙の中から最もよい言葉が選取りられる。従って、そこにはその社会が一番よいものとして所望する特殊な文化的性格があらわれる。命名にはさまに文化の特殊的側面が投射されている。

世界の命名法について、前掲書「世界の姓名」は各国の人々の姓名の構造と個人名に使用される用語を検討し、その相似性と関連性をたどって、後世に重大な影響を与えた世界の命名法の三大源流として、次の三つを挙げている。(1)イスラム教文化圏の中心となるアラビア人の命名法 (2)ローマ・カトリック教を信じるラテン人の代表としてのスペイン人の命名法 (3)儒教文化圏の原点としての中国人の命名法⁽¹⁾

インドネシアは上記命名法の源流母体である三つの文化圏のいずれからも強い影響を受けている。特にイスラム教の影響については、国民の約9割が信徒である事実に見られる通り格別である。とはいえ、命名法については本人の個人名の次に父の名を、その後ろに祖父の名を続けるという、いわゆる系図式のアラビア方式を採用することなく、個人名に父の名を付けるにとどめている。ヒンドゥー文化の濃厚なジャワの人々についても、名前に使われる用語は、多くサンスクリットに由来する古代ジャワ語からとったもので、語彙的側面ではすこぶる影響を受けているが、インド式命名法にある姓を受容せず、構造の上では独自性のある個性を今日も保持している。それでは、インドネシア人の名前はどのような構造と特質を持っているのであろうか。

II. 命名行為

新生児に対する命名は、その子の父親あるいは母親が行うのが一般的であるが、祖父、祖母による場合も多い。その他、叔父叔母などの近親者が参加することもある。親族以外の命名者は父親の職場の上司、あるいは地

インドネシア人の名前

元の有力者、知名人など一般外部の人々とイスラム教におけるキアイなど宗教上の指導者に分かれる。ヒンドゥー教の島、バリでは僧侶による名づけも見られる。

この命名は子供が生まれてから数日のうちに行なわれるが、名前の社会的認知のためには一定の儀式を持たなければならない。出生をめぐる一連の儀式の中で、特に名前を披露するための一般的な儀式としては、地方によって、日取りなどかなりの相違があるが、普通、生後40日目（スンダの場合）に行なわれるチュ克蘭（cukuran）がある。赤ん坊の髪をはさみで切る象徴的儀式で、近所の人たち、親戚、親しい知人が招かれて催される。招かれた客は、一番の年配者に抱かれた赤ん坊を囲んで、マルハバンとよばれるイスラムの歌を歌う。17節を歌い終わったところで、順に赤ん坊の髪に少しづつはさみを入れる。終わると花の入った聖水で髪が净められ、お祈りの後で名前が正式に披露される。命名者、名前の意味、名づけの動機などあわせて、主催者が説明する。その後でいわゆる共食の儀式スラマタンに入るが、その時、赤と白のお粥が出される。この命名披露の儀式はアチェ、ミナンカバウ、ジャワ、スンダ、プギス・マカサルなどイスラム教の浸透した地域で、規模の違いはあるが、広く行われている習慣である。

命名の社会的認知を受ける儀式とは別に、法的にはカブパテン（州の下級の二級行政区）レベルの役所に子供の誕生とその名前を届け出、出生証明を得ることで、社会の一員として、初めて認められる。

ところで、親が子供に名づける場合の動機や意図はどんなものであろうか。名前には親の願いがこめられている。資料的には不十分ではあるが、アンケート回答から推測して、名づけの動機はおおよそ、つぎの三つに分類できるのであろう。

(1) 出生時の状況、場所、時期から

8月に生まれたから Leo Kristi。心配で、憂慮される状態で生

まれたため「憂慮」を意味する Endang Suprihatin という名前などがその例である。

(2) 意味の上から

①人にあやかる一宗教、歴史伝説上の人物。その他の知人など。

②自然、動植物にかかわる

③親の願望—健康、幸福、信仰、その他道徳的特性

(3) 音声上の響きから

以上、三つの動機のうち(2)が最も多く、なかでも、①が、続いて③が群を抜いている。この点については、つぎの章で詳しく吟味する。

Ⅲ. 名前の構造と特徴

1. 多様な民族構成

インドネシアは多数の民族集団で構成される複合民族国家である。民族集団の数は250とも300ともいわれ、互いに言語、社会構成、生活様式を異にしている。加えて、インドネシア住民の宗教生活は一般に90%がイスラム教徒であるといわれているが、実際には、土着のアニミズム信仰にヒンドゥー教が重なり、その上にイスラム教が被さった、いわば重層信仰である。同じイスラム教徒とはいえ、古くからヒンドゥー統一王朝が栄えたジャワは土着的・ヒンドゥー的要素がきわめて強く、一方アチェ、ミナンカバウ、スダ、ブギス・マカサルではよりコーランに忠実で厳格な信仰が守られているという宗教的濃度の違いがある。これにパタック北部、ミナハサ、アンボンなどの地域で飛び地的に信仰されているキリスト教が加わる。こうした宗教の違いが独自の民族文化に濾過されたとはいえ、それぞれ住民の名前の中に強く反映している。

では、宗教との係わりの中で、それぞれの民族集団はどのような名前の構造を持っているのであろうか。全ての民族集団を射程にいれることは不可能なので、ここでは主要な民族に限って記述を進めていくことにする。

インドネシアは独立して以来、各民族集団を超えて統一インドネシアの国民意識を形成していく至上命題から、意図的に民族別の統計、その他比較資料の作成を回避している。そこで、この小論では民族別の名前を分類するための手がかりを得るため、インドネシアの著名人を網羅した1983—1984年版 “APA DAN SIAPA—sejumlah orang Indonesia”ⁿ⁽²⁾ を用いる。これには総数833人の著名人の完全な名前、生年 月 日と出生地、宗教、教育、職業歴、現住所が記載され、各人のプロフィールが述べられている。

これをもとに、分類を試みた結果によると、記載されている民族別の人数は、ジャワが326人で最も多く、次にスダ89人、華人73人、バタック48人、ミナンカバウ43人、ブギス・マカサル19人、ミナハサ15人、アチェ14人、バリ 8人、その他の順であった。この数は、とりまなおさず各民族のインドネシアに対する貢献度を示すバロメーターの一つともなるもので、民族ごとの勢力を現わしているといえよう。なお、このなかで人口比からいって、約2.5パーセントに過ぎない華人の数が異常に多い点、注目される。

さらに、宗教別に分類してみると、記載されている著名人のうち、ジャワ、スダ、ブギス・マカサルは80%以上、アチェは90%以上、ミナンカバウにいたっては全員がイスラム教徒である。バタックの場合イスラム教徒とキリスト教徒がほぼ二分している。バリはヒンドゥー教徒、ミナハサは90%以上がキリスト教徒。華人は半数がキリスト教徒、仏教20%、イスラム教徒は10%未満である。

2. 主要民族の名前

インドネシア人の名前は一語あるいはそれ以上の語で構成されている。“APA DAN SIAPA” に載っている833人のうち、名前が一語のものは152人、二語は489人、三語は167人で、それ以上になると、四語は23人、五語は2人に過ぎない。名前を構成する語数からみると、60%弱が二語から成り立つ名前が多く、三語の名前が20%、一語の名前が18%余りでこれに次いでいる。これらの名前の一つ一つに、それぞれの民族が信仰する宗

教と強く結びついて育成されてきた文化の特質の一端が隠されている。以下いくつかの主要民族ごとに名前の構造と特徴を見てみよう。

(1) ジャワ

ジャワ人の名前には一語のものが比較的多い。むしろ二語名が主流ではあるが、一語名は24%で、三語で構成されている名前の比率をかなり上回っている。一語名の場合、それが本人の個人名であることはもちろんであるが、これが二語、三語になっても本質的に構成方法は変わらない。二語以上の場合も、いずれも個人名で、いずれか一方が苗字に相当するものではない。ただ、二語以上の名前になると、「個人名＋父親の名の一部」の形式をとることが多い。71例中、48例がこの形式に従っている。父親の名のどの部分を取って、どこに組み入れるかについては、いくつかの型があるが、次の①のように、後ろの語を後ろにつける傾向のほうが強いようである。

① (父の名) Zuhdi Rahardjo

(子の名) Mohammad Dawam Rahardjo

② (父の名) Mardjono Martosoedirdjo

(子の名) Mahar Mardjono

③ (父の名) Abdul Aziz

(子の名) Abdul Ghany Aziz

④ (父の名) Aliman

(子の名) Ali Wardhana

父親の名が一語名であっても、その子もまた一語であるとは限らず、二語以上の名前にもなる。また、その逆に父の名が複数語であるのに、その子の名が一語であることもある。語数の上に一定の法則性はみられない。さらに、三語以上の名前の場合、命名者が父親だけでなく、複数の人に命名されることもある。例えば、Ahmad¹Chalid Mawardi² (¹ は祖父の命名、² は父の命名)

つぎに、ジャワ人の名前は音韻の上でもいくつかの特徴をもっている。

男性の名前は末尾の音が母音〔o〕で、女性の場合は〔i〕で終わることが多い。(男) Suprpto (女) Suprpti などのように。同じジャワでも東部ジャワでは末尾音〔o〕が〔a〕に入れ変わる。もう一つの特徴として語頭音が 'S' で始まる名前の数が最も多いことである。特にサンスクリット起源で「すばらしい」という意味の Su- (旧綴りは Soe-) で始まる語が多く、'S' の項の名前242例のうち、144例もあり、高率である。例えば、Soekowati, Sukarno, Sudomo, Suryaatmaja など。

それではつぎに、名前を構成する語の意味を考えてみよう。もと貴族など比較的身分の高い家系の子孫には古代ジャワ語あるいはサンスクリットからとった「栄光」、「偉大」など高貴な意味をもった語を用いて名づけが行なわれている。同じヒンドゥー系の言葉にしても一般庶民の名前と比べて、意味の上で荘重さがあり、ニュアンスの違いが感じ取られる。あくまでジャワ人は大半がイスラム教徒ではあるが、現在の宗教にかかわらず、名前はそのほとんどが古代ジャワあるいはサンスクリットなどヒンドゥー的要素の濃厚なものである。

”APA DAN SIAPA”にある326人のジャワ人の名前を意味の上から、宗教的色彩で分類すると、ジャワ・ヒンドゥー名は244人で約75%以上を占めている。

Soeharto (現大統領)

Widjoyo Nitisastro (経済、財政、産業調整相)

Moeryati Soedibyo Hadiningrat

これらの名前のなかには、わずかではあるが、次のようなほかの宗教にかかわる語と混合した形で用いられている場合もある。

キリスト教+ジャワ・ヒンドゥー：

Franciscus Xaverius Hadisoemarto

Yusuf Bilyarta Mangunwijaya

イスラム教+ジャワ・ヒンドゥー：

Ali Moertopo (元情報相)

Abdul Hadi Widji Muthari

純粋なイスラム名は49例で15%。次のような名前がある。

Mohammad Anwar Ibrahim

Abdul Mun'im Idries

キリスト教に由来する名前は23例で、7%。次のようなものがある。

Johannes Baptista Sumarlin

Leonadus Benyamin Meordani

最後に、ジャワで最も一般の名前を男女それぞれ10ずつ、意味をそえて列挙しておく。インフォーマント数名に聞き、頻度の多い順に並べたものである。

(男性)		(女性)	
Slamat	(安全、平穏)	Sri	(稲の女神)
Subagyo	(幸福)	Dewi	(女神、美女)
Budi	(理性、知恵)	Rahayu	(安全、平穏)
Soemitro	(良い友人)	Endang	(美しい)
Bambang	(勇敢、男性的)	Sari	(花、核)
Agung	(大きい)	Sulistyowati	(美女)
Eka(Eko)	(一番目)	Astuti	(賞賛、祈り)
Teguh	(確固とした)	Kartika	(星)
Fajar	(夜明)	Nur	(光)
Santoso	(強い)	Diah	(明るい)

以上、わずかな例ではあるが、男女の共通語いが「安全」を志向していることは人類共通の願いとしてうなずけるし、違いのなかにも、男性の名前の意味が倫理・道徳的側面と強く結びついているのとは対照的に、女性は「美しさ」に向かった願望を表示しているなど、ジャワの文化的側面を物語っている。女性の名の筆頭が稲の女神を表わす言葉である点、興味深い。

(2) スンダ

スンダ人の名前は、様式の上ではジャワに準じるが、どちらかといえば、構成語数の上でジャワと比べて若干異なっている。一語で構成される名前の比率が10%程度で、18%の三語名より低く、二語名が約70%に達している。

通常、二語あるいは三語で名前は構成されるが、いずれも個人名である場合と、一語は父親の名前を継承する場合とがある。一般に、家柄のよい家系が父親の名を個人名と組み合わせて、生まれた子の名前として命名する傾向が強いようである。ただし、女性の場合は父親の名前をもらうことはごくまれである。"APA DAN SIAPA" に父親の名も記載されている25の事例のうち、父親の名をもらったケースは20例もあった。そのうち父の名の一部を個人名の前に組み入れる命名様式は2例と少なく、ジャワと同じく後ろにつける様式が好まれている。この親子の名前の一部継承ぐあいをさらに3世代に広げて見てみよう。

- ① (祖父の名前) Damidji
- (父の名前) Memed Odo
- (長男の名前) Dadang Sudjana
- ② (祖父の名前) Doedoeng Joesoep
- (父の名前) Abdulrachman Abdulkadir
- (長男の名前) Komar Abdulkadir

こうした命名法では世代間にまたがる家系は、たとえ②の場合でも父と子の関係は判断できても、祖父との関係は確認できない。

つぎに、スンダ人の名前の音声上の特徴であるが、男性と女性の名前の違いの中に現われている。語尾の音が男性の場合、母音、とくに[a]で終るのに対し、女性の名前は[i]または-sihで終ることが多い。

- (男の名前) Nana. Rusdiana. Supriatna
- (女の名前) Tati. Supartini. Kurniasih. Endasih

さて、名前に用いられる語はどんな意味を持っているのであろうか。ス
 ンダの住民の名前にも、用いられている語彙の意味から見ると、ジャワ同
 様、ヒンドゥー・ジャワの影響が深く浸透している。しかし、ジャワより
 一層イスラム信仰が強いためか、ヒンドゥー系の名前が主流であるとはい
 え、イスラム的色彩の名前がジャワより相対的に多い。87例中、51例がヒ
 ンドゥー系の名前で、次がイスラム系の20例、そして、キリスト系4、仏
 教系2、その他の順である。いずれも、ジャワの場合とほぼ同様の傾向を
 見せており、ここでは次の二つの点を指摘しておく。

その一つは、同じヒンドゥー・ジャワ的色彩の言葉から取った名前とは
 いえ、上流階層と一般庶民の間に違いが見られる。

a. Mochtar Kusumaatmaja. Ginanjar Kartasasmita.

b. Ajip Rosidi. Maman Suryaman. Djodjon.

a. は上流階層、b. は庶民的な名前である。前者が26例、後者が25例で、
 はほぼ半々の事例が見出された。

いまひとつは、特別な宗教的背景を持たない語彙を並べた名前である。
 意味よりも、音声上の響きが重視される、いわゆる「聞いて耳に快い」名前
 である。この種の名前は、わずかながら増加する傾向にあるように思われ
 る。 例えば、

Nus Mualim. Harla Bekti.

最後に、以下スンダで最もポピュラーな名前をあげておく。

(男性)		(女性)	
Ujang	(独身男性)	Euis	(美しい)
Agus	(良い、すばらしい)	Neneng	(上流の女性)
Asep	(立派、ハンサム)	Imas	(金)
Dadang	(利口・ハンサム)	Nurhayati	(命の光)
Tatang	(利口)	Eulis	(美しい)
Udin	(指導者)	Enok	(美しい)

Surya	(太陽)	Nyai	(女性)
jaitan,	(英雄)	Siti	(良い女性)
Nurdin	(宗教の光)	Tati	(丁寧、上品)
Muhammad	(マホメット)	Lilis	(美しい)

ジャワ人の名前と語彙の上では、多くの共通点を持っている。ただ、男性の名前にイスラム系の語が入っている点、注目される。

(3) バタック

バタックはジャワ、スンダなどの他の地域と違って、独自の氏族名マルガを有する。社会の親族組織は、親族集団の成員権が父系出自により定まる父系制で特徴づけられ、祖先との関係を常に父方を通じてたどることができる。マルガはこの父方の単系出自集団を表示する名称で、一種の姓の機能をはたしている。したがって、バタック人の名前は、「個人名+マルガ名」の形式をとり、マルガ名は一語であるから、原則的に二語以上で構成されている。二語名と三語名の比率は47%：32%で、二語名の方がやや多い。名前を構成する語の順序を知るため、下に例をあげておこう。

- a. Harun Nasution
- b. Ali Sofyan Siregar
- c. Tahi Anton Muara Simatupang

下線のある語がマルガ名で、ほかは全て個人名である。三語名の場合、キリスト教徒、特にカトリックであれば、真中の第二語が洗礼名になることが多い。

バタック社会の住民の命名法を特徴づけているマルガは、共通の祖先から氏族が世代を下るにつれて、膨張発展していき、さらに小さく分岐していった。それゆえ、マルガにはずっと祖先を遡れる歴史的に古いものと、数世代しか遡れない新しいものがある。また、マルガ名によって、氏族を統括する支配力の強弱の違いもある。しかし、ここではマルガの歴史的濃度を考慮することなく、ごく一般的な名を例としてあげておくにとどめ

る。

Nasution, Siregar, Harahap, Tobing, Lubis, Pan-
jaitan, Panggabean, Hutagalung, Silalahi, Simbolon,
Tambunan, Sihombing, Sinaga, Sitompul, Simanungkali,
Sitorus, Simanjuntak, Napitupulu, Siahaan, Hutabarat

これらのマルガ名は次のように父親から息子に継承されていく。

(曾祖父の名前) Aman Sikkola Sigalingging

(祖父の名前) Wilianus Sigalingging

(父の名前) Mirwan Sigalingging

(長男の名前) Leonardo Sahatma Tamaro Sigalingging

バタックの人々の信仰する宗教の人口構成は、「多様な民族構成」の項でみた通り、イスラム教とキリスト教が半々であった。個人名を意味の上から分析してみると、ジャワやスンダでは、本人の信仰とは関係なく、ヒンドゥー系の言葉が名前につけられていた。しかし、バタックの場合は被命名者本人の宗教が直接名前に反映していることがわかる。48例のうち、イスラム的な名前は18例、キリスト教的なもの17例。両者とも名前のもつ宗教的色彩と自分自身の信仰とが一致している。その他、いずれの影響も受けていない、古来からの伝統的な名前と思われるものが7例、ヒンドゥー・ジャワ的な名前、6例が見られた。

① (ヒンドゥー的) Ashadi Siregar

② (イスラム的) Arifin Mohammad Harahap

③ (キリスト教的) Johannes Chrisos Tomus Simorangkir

④ (伝統的) Radja Pingkir Sidabutar

それでは、最後にどのような意味の語が名づけに好まれ、用いられているか見てみよう。下記は、バタック人の最も一般的な名前である。

インドネシア人の名前

(男性)		(女性)	
Poltak	(昇る、明るい)	Dame	(平和)
Binsar	(昇る)	Sondang	(光)
Maruli	(幸福／恵を得る)	Tiur	(明るい)
Hasudungan	(最愛の)	Uli	(美しい)
Sihar	(健康)	Ria	(喜び)
Togu	(固い、強い)	Hotma	(しっかりした)
Pinudang	(幸せ運ぶ)	Rumandang	(光る)
Parulian	(恵を得る)	Minar	(明るく輝く)
Mangapul	(慰め)	Tioma	(清い)
Manorang	(明るくする)	Roina	(母性)

これまで見てきたジャワやスンダと同様の共通語彙が見出だせるが、女性の名前に「喜び」を表わす言葉が入っていること、男性の名前に動詞表現が用いられていることに特徴があるように思われる。女性には快活性が、男性に能動的な働きかけが、より期待されているのではなかろうか。

(4) ミナンカバウ

前に述べた父系氏族のバタック社会とは対照的に、ミナンカバウは母方を通じて血縁をたどり、親族集団の成員権が母から娘へと受け継がれていく母系制の社会である。ところがバタック社会では父系氏族名マルガがあり、命名の制度の中に親族組織の特徴を見ることができるが、ミナンカバウでは命名制度に、母系制をうかがわせる手がかりは何も与えられていない。子供の命名法は双系制の原理に基づく親族組織を持つジャワ社会と同じ様式である。

名前を構成する語数は、一語名は比較的少なく、二語で成り立つ名前が70%で主流である。三語名が15%で、これに次ぐ。二語名の場合は、いずれも個人名が多く、三語になると、最後の語が父親の名前であることがよく見られる。個人名についても、いずれか一つが、両親双方の名前を合成

して作られたものであることもある。また、複数の人が命名者となり、名づけられた名前が長くなる場合もある。これらの名前の構成様式を、次の例で見てみよう。

- ① (父の名前) Kamaruddin
 (子の名前) Kamil Kamka
- ② (父の名前) Mohammad Hatta
 (娘の名前) Halida Nuriah Hatta
- ③ (父の名前) Suffri¹ Jusuf² (¹ 祖父母の名の合成。 ² 祖父の名)
 (子の名前) Gary Rachman³ Makmun⁴ Jusuf (³ と ⁴ は祖父の命名)
- ④ (父の名前) Aziz
 (母の名前) Ramalia → (子の名前) Azram

つぎに、宗教文化の影響が名前の語彙の中にどのように反映しているか見てみよう。イスラム教の強い地域だけあって、被命名者の信じるイスラム教がそのまま名前に現われている。ヒンドゥー・ジャワ的な名前はほとんど見当たらず、42例中、32例がイスラム系の名前で、残りは古来の伝統的な名前である。

なお、イスラム系の名前の場合、女性の名前の語尾が -ah になるなど、音韻上の特徴が見られる。

その他、一種のハイカラ・ムードに押されてか、本来の名前に西洋風の名前を接ぎ木した命名法が生まれている。それはイスラムともキリスト教とも直接、係わりのない新しい名づけの仕方といえる。例えば、

Sofiadi Octobaran Roestam¹ (¹ 従来の名前)

つぎに、名づけにはどのような意味をもった言葉が選択されているのかを知るために手がかりとして、ミナンカバウ社会で最もポピュラーな名前をあげておく。

インドネシア人の名前

(男性)		(女性)	
Arifin	(聡明な)	Fatimah	(マホメットの娘)
Aulia	(高貴な)	Chadidjah	(〃 の妻)
Ahmad	(善良な)	Aminah	(〃 の家族)
Taufik	(善行、好意)	Ros	(バラの花)
Anas	(人類)	Aisyah	(従順、忠実)
Abdullah	(アラーに忠実)	Mariana	(現代風の名)
Muhammad	(マホメット)	Farida	(〃)
Ali	(マホメットの女婿)	Syamsul	(太陽)
Ibrahim	(アブラハム)	Nuriah	(光)
Karim	(寛大な)	Dahlia	(ダリアの花)

以上、イスラム教の強い地域だけあって、男性の名前にはイスラム教の徳性が、女性の名前にはマホメットの家族の名にあやかっただけのものが多い。このようなイスラム名は、ミナンカバウ以外の地域でもイスラム教徒に好んで用いられる名前である。

(5) バリ

ヒンドゥー教を受容したバリ島は、直接的ではないにしても、少なくともインド起源のカースト制度の影響を受けている。バリのカーストは、インドのように社会の主軸となる規範ではなく、あくまでも相互に係わりあって、一体化している社会的規範の一種にすぎない。とはいえ、このカーストがバリ人の名前の構造に重要な役割をはたす。原則として、バリの命名様式は、被命名者の「カースト名+個人名」の形をとり、どのカーストに所属するかによって、名前の構成様式が異なってくる。カーストはトゥリワンサ(カースト内)とジャバ(カースト外)の二種に大別され、前者は住民全体の10%程度で、大半は後者に属する。トゥリワンサは、ヒンドゥー教のいわゆるブラマナ(僧侶)を最上位にサトリア(貴族)、ワイシャ(商人、

職人)の三つの階級からなる。ジャバはスードラ(農民)階級をいう。これらのカースト名は現在の職業には関係なく、父親から子に継承される称号である。それぞれの階級を表わすには次のような称号がある。ただし、ワイシャとスードラは、近年、境界線があいまいで、ほとんどの住民がワイシャであると自認している。これらの階級の人達の名前にはカースト名がつかず、生まれた順序を表示する、いわば出生順位名が個人名の前にくる。

①ブラマナ：(男) Ida Bagus 例 Ida Bagus Mantra

(女) Ida Ayu

②サトリア：(男) Anak Agung I Gusti Dewa Gede

(女) Anak Agung Ayu Gusti Ayu Dewa Ayu

例 Anak Agung Mandra

③ワイシャ／スードラ：第一子 Wayan (スードラは Putu)

第二子 Made

第三子 Nyoman

第四子 Ketut

五番目の子からまた一番目の Wayan / Putu に戻る。そして、この名前には男女による区別はない。区別するためには、これらの名前の前に、男であれば、I を女は Ni をつける。

I Ketut Surajaya (四男、個人名・スラジャヤ)

Ni Made Puspawati (次女、個人名・プスパワティ)

この他、名前に現われた、性別を識別する指標として、上記の例でも見られる通り、個人名の語尾音が男性[a]で、女性になると[i]で一般に終わるという音韻上の特徴をもっている。

ところで、ワイシャおよびスードラに見られる出生順位名の表示様式は古くは上のカーストにも用いられていたが、現在では少なくなっていると言う。

I Gusti¹ Putu² Arka³ (¹サトリア²長子³個人名)

以上、バリの命名様式は独自の構造と特徴をもっているが、最近の傾向

として、まさにバリは完全に宗教的に一体化された社会に生きているとはいえ、外国とも感じられるヒンドゥー以外の外部世界（実際、バリ人はヒンドゥー世界以外の人々を外国人をさす「オラン・アシン」と呼んでいる）との急速な接触、特に結婚による融合から、命名様式の上にも、一部でその整合性に混乱が生じているようである。

最後に、個人名についてであるが、構成する語数は具体的な資料を欠くため数量化できないが、一般的な傾向として、一語が大半で、二語は少なく、それ以上になることはまれである。それでは、この個人名にはどのような意味の語が愛好されているか、男女10ずつの例で見てみよう。

(男性)		(女性)	
Wenten	(存在する)	Sari	(花、核)
Jaya	(偉大、卓越)	Ratna	(花の名)
Artha	(富裕、財産)	Tirta	(聖木)
Oka	(子供)	Dewi	(女神)
Chandra	(月)	Budi	(知恵、理性)
Yoga	(瞑想)	Astiti	(信心、奉仕)
Karma	(行為)	Raka	(姉)
Puja	(祈拝、参拝)	Murni	(純粹)
Karya	(仕事)	Ratih	(月)
Yasa	(善行)	Suryani	(光)

ジャワの命名語彙と比べて、特に女性の名前に多くの共通性が見られるとはいえ、より濃厚にヒンドゥー的色彩が反映している。同じ語い“Budi”がジャワでは男性に、バリでは女性の名前になっているなどいくつかの興味深い点が指摘できる。

(6) ミナハサ

スラウェシ島北部のミナハサ半島にあり、一般にはメナドとよばれるミナハサ地域における親族の社会的結合は、父方、母方の双方を通じて血縁

関係をたどる双系制の原理で結ばれている。しかし、ジャワと違って、古くからパトゥアリ⁽³⁾と呼ぶ、独自の氏族集団とも言える、親族関係を保持していた。オランダの植民地時代、キリスト教の受容とともに、このパトゥアリが、いわゆるファミリ (famili) として定着。そして、パトゥアリの集団を表示する名前が、いわば family name として用いられるようになった。以来、ミナハサの住民はインドネシアでは珍しく、西洋式の姓をもった命名制度を踏襲している。

したがって、苗字をもっているため、ミナハサの人々の名前は一語名はなく、すべて二語あるいは、それ以上の語数で構成される。その割合を知る目安として、少ない数値ではあるが、“APA DAN SIAPA”には13例の内、二語が5例、三語と四語がそれぞれ、6例と2例見出された。つぎに、名前の一般的様式を見てみよう。

Jimmy Wurangian

Carla Ester Mentan

Pinkan Leonora Fransiska Paat

下線のある語が苗字である。これを三世代の世代間で見ると次の通りである。

(祖父の名前)	Benjamin <u>Kereh</u>
(父の名前)	Joseph <u>Kereh</u>
(子供の名前) 長男	Johanes Benjamin <u>Kereh</u>
次男	David Budiarto <u>Kereh</u>
長女	Grace Lydia <u>Kereh</u>
次女	Jaqueline <u>Kereh</u>

最もポプラーな家姓には、次のようなものがある。

Waworuntu, Lalamentik, Ingkiriwang, Supit, Pongoh,
 Worang, Palar, Wenas, Sumanti, Sumual, Wangko, Massie,
 Sumanpow, Manoppo

苗字をめぐって、ミナハサには、他の地域では見られない、世代間にまたがる特殊な命名法がある。おそらく、近親婚を回避するための方策としてであろう、一番上か、または、最も愛されて生まれた男の子に、祖母の姓をつける。女性の苗字は、結婚とともに消えていくため、孫の代で再復帰させるわけである。同じ姓を持つ女性とは、同一祖母を共有しているとして、結婚が禁じられているという。

さて、姓の前にくる語はすべて個人名で、一語あるいは、二語かそれ以上の語で構成されている。住民の90%以上がキリスト教徒であるという事実に関連して、個人名もまた大半が、聖書の登場人物など、キリスト教にちなむ語彙からとられている。その他、個人名には Wilhelmina, Napoleon, Fransiskus など西洋世界を中心とする、歴史上の人物の名前が好んで用いられている。

(7) 華人の名前

ここでいう華人は、中国系のインドネシア人である。これらの人たちの名前は、国籍問題と密接に係わっている。オランダ植民地時代からのいきさつで、中国とインドネシア両国の二重国籍をもつ華人の単独国への帰属が明確になったのは、1955年バンドンで開催されたアジア・アフリカ会議を機会に、この二重国籍問題を終結させるべく中華人民共和国との間で条約が締結され、その後1960年に、同条約が批准⁽⁴⁾されて以降のことである。これを機会にインドネシア国籍に帰属した中国系の人たちに、従来の中国名からインドネシア名への改名が奨励された。この改名への動きは1965年に起きた「9・30事件」と呼ばれる、いわゆる共産党クーデター未遂事件が社会的インパクトとなって急速に進んだ。

それでは、華人の命名はどのような構造と様式をもっているのだろうか。“APA DAN SIAPA”に記載されている華人の名前には表記の上から、大きく分けて、四つの型が認められる。まず、従来の中国名のまま、次に中国名とインドネシア名の両方を併記、第三に中国名とインドネシア

- この他に次のような中国語名を連結し、一語としてインドネシア名にした改名の例がある。

完全なインドネシア名が54例で最も多く、中国名のみと両名併記は、いずれも8例、合成形式は5例が見られた。

最後に、インドネシア名の語彙に現われた文化的宗教的背景を見てみると、ヒンドゥー・ジャワ的な名前が40例で最も多く、イスラム系14例、キリスト教的な名前13例がこれに続いている。これらの名前には被命名者本人の宗教が直接、反映していないことはジャワの命名様式と同様である。むしろ、一人の名前の中に、ヒンドー・ジャワとキリスト教、あるいはヒンドゥー・ジャワとイスラムなど異なる宗教的背景をもつ要素が混合した様式をもったものも少なからずある。

3. 簡略形式と呼び名

一語名は別として、複数語からなる名前は簡略化して一語で表記したり、あるいは呼びたい場合、どの部分をとればよいのか、特に外国人のわれわれにとって難しい問題である。この点について、記載例の最も多いジャワ人の名前で見よう。

188例のうち、簡略化形式をとった場合、最初の語を核とした例が最も多く、152例。一方、末尾の語が核となった例は24例で少なく、中間の語を核とする例はさらに少なく、わずか8例に過ぎない。

- ① (最初の語) Soeranto Partoatmadjo
Harsja Wardhana Bactiar
- ② (末尾の語) Selo Soemardjan
Hario Soetarjo Soerjosoemarno
- ③ (中間の語) Abu Ridho Sumoatmajo
Mohammad Husnie Thamrin Marse

以上の例に見られるように、ジャワやスダでは、一般に名前を構成する最初の語が省略形式の基語になる。一方、バタックやミナハサでは末尾に位置する語、すなわち苗字が、そしてバリ社会では、トゥリワンサに所属する人の名前はカーストを表わす称号が、ジャバ階層の人は出生順位名が基語となる。例えば、

- (バタック) Rajiman Simarmata
- (バリ) Ida Bagus Oka Puniatmaja (カースト名)
I Nyoman Gama (出生順位名)

このような一語による簡略形式は、第三者が被命名者を呼ぶ時に用いられる呼び名と呼応する。つまり、この語で、第三者は相手と呼ぶことができる。ただし相手が目上の場合、この簡略一語で呼ぶには、その前にその人の社会的ステータスを表わす称号、あるいは尊称を常に伴う。こうした称号、尊称については、後に「称号」のところで触れる。

さらに、この簡略形式の一語は、その語を構成するいくつかの音節の一部のみをとって短縮し、近親者、身近な人などの間で呼ばれる愛称ないし、それに類する呼び名を形成するベースとなる。

こうした音節の一部をとった省略形式には、次のような型が見られる。

(1) 前部の音節をとる

- a. Is (Ismail), Koes (Koesbini), Kris (Christianto)
- b. Danar (Danarsih), Probo (Probosutedjo)
- c. Won (Wonohito), Djun (Djunaedi)

(2) 第一音節の欠落

Tjipto (Soetjipto), Dharta (Sidharta), Dono (Sardono)

(3) 末尾の音節をとる

- a. Djo (Kartidjo), Rum (Pranawengrum), Leh (Saleh)
- b. Adi (Permadi), Ndo (Arswendo), No (Soekartono)

(4) 中間の音節をとる

Man (Firmansah), Dwi (Sudwikatmono)

一般には、名前の省略形式は、前部音節を省き、後部音節を残すと言われているが、調べてみると、実際には、その逆に後部音節を省略する形式も多く、前部省略型と、それ程変わらない頻度で現われている。

IV. 名前の変更

インドネシアでは、名前の変更が容易に行なわれている。社会生活をおくっていく上で、諸障害に遭遇した時、名前を変えることにより、それを乗り越え、新しい運を開こうとする。

ところで名前の変更には、旧来の名前に一部補足、あるいは修正を加える部分的変更と、元の名を残しながらも別に新しく命名し直す別名、さらに、本来の名をすてて、新しい名前に改める、いわゆる改名の三つのケースが考えられる。

① (夫) Haryanto
Dewi Mayangsari → Dewi Haryanto/Mayangsari
Haryanto

(夫) Henry A Rudolf Tailaar
Martha → Martha Tailaar

② (夫) Saroso Wirodiharjo
Julie Sulianti → Julie Sulianti Saroso

(夫) Hadi Santoso
Hajah Danarsih → Hajah Danarsih Hadi Santoso

結婚による名前の変更を見ていく上で、一種の称号と関連して、バリとミナンカバウがそれぞれ持っている、他の地域にはない、独自の次のような特徴ある様式は見逃せない。バリ社会におけるカーストをめぐる称号の

体系は結婚の形態に明示されている。伝統的な慣習アダットに従えば、同一カースト内婚が理想で、下位のカーストとの結婚が許されるのは、男性メンバーのみである。従って、男性はいかなるカーストの女性と結婚しても、自分のカースト名は変わらないが、逆に女性の場合は、スードラの人が上位カーストの男性と結婚すると、特別の称号 ‘Jero’ が個人名の前に与えられ、プラマナ、あるいはサトリアのカーストの女性が下位のスードラの男性と結婚すれば、元のカースト名は消失する。

いまひとつは、結婚後ミナンカバウの男性に与えられる称号である。母系制社会のミナンカバウでは、女性ではなく、男性の方が婿入りする結婚形態に従う。それゆえ、女性の名は変わらないが、婿となった男性に称号が与えられ、以後この称号名で呼ばれるようになる。一種の別名である。結婚によって男性が得る名前は、「称号 + 新しい名」の形式をとる。この称号には、Sutan, Baginda, Datu, Labai, Malin, Raja, Bangsa などがある。記載様式は、次の通りである。

Muhamad Nazir gelar¹ Sutan² Bandaro³ (¹ 称号の意、² 称号名、³ 名前)
結婚後は、² の称号名で、義理の両親だけでなく、第三者からも呼ばれる。ただし、聖地巡礼を終えた場合は、元の名前に復帰する。

以上の名前の変更の他に、旧来の名前を廃して、新しい名に切り替える改名がある。最もよく行なわれる改名は、病気がちの子供に対するもので、名前の意味が重すぎるからであるとして、普通の名前に改めたり、また逆に、名前が弱すぎるためであるとして、勇壮な名前に改めたりする。この際、親が単純に考えて、新しい名前をつけることもあれば、祈祷師に頼ることも、またジャワに古くから伝わる数字合わせによる占いによることもある。ミナハサでは、病気、その他の災厄に見舞われた子をブアン (buang 捨て子の意) と称して、祖母などほかの近親者に育てられる習慣が、今も生きている。この習慣は、社会システムの一環として作動しているらしく、ブアンの運命にあるとはいえ、その子は健全に成長していくと言う。

名前と呪術の結びつきが命名行為の中に生きている実例であろう。

これらの改名行為は病気、事故などの災厄に遭遇した被命名者のみを対象にしているのではなく、メッカへの巡礼を終えた人、社会的に成功した人なども対象となる。社会的状況にふさわしい名前をつけようとする動機が働いている。

つぎに、インドネシアで政治的なからみ合いを背景に、かなり大規模に行なわれた改名として、中国系インドネシア人、いわゆる華人を対象としたインドネシア名への変換がある。改名に当って、当事者たちは、元の名の一部を残しながら、新しい名前を考えたであろうし、漢字が表意文字であるからには、意味を新しいインドネシア名に置き換えた、翻訳方式による改名も考えられたであろう。わずかな例ではあるが、次の改名後の名前には、元の名前の一部痕跡が感じ取れる。括弧内が元の中国名。

Sudargo Gautama (Gouw Giok Siong),

Sudono Salim (Liem Sioe Liong)

Mu'min Ali Gunawan (Lie Mo Ming)

最後に、正式の名前が変わるわけではないが、呼び名が変更する場合に触れておく。一般に、子供時代は、身内の者、親しい関係にある人々からいわゆる愛称で呼ばれることが多い。そして成人すると、元の正式名に戻る。むしろ、子供の時から愛称でなく、正式名で呼ばれる場合もあるし、成人しても、そのまま愛称で呼ばれるケースもある。こうした子供時代の愛称が成人すると変わるという、呼び名の変更で、パタックの社会は非常に興味深い様式上の特徴をもっている。同地では成人するまで、一般に男の子であれば、'ucok'、女の子は 'butet' (いずれも、子供の意味) と呼ばれ、成人してからは個人名で、そして、結婚して子供ができると、その子の名を起点に、誰々の父、誰々の母という形をとり、例えば、子供の名が Leonardo (愛称 Leo) であれば、父親は Amani Leo, 母親は Nai Leo と呼ばれる。成人した一時期を除いて、常に「親子関係」という社会関係の

枠内で呼び名が形成されている。

ところで、愛称の型は、すでに「簡略形式と呼び名」で述べた様式と、名前を構成する一部語音の類似音（例えば、Widjojo が Willy と呼ばれるなど）によるものがある。さらに、この他、子供の特徴をとらえてつけられた綽名による愛称がある。

V. 称号

社会の近代化とともに、貴族階級に継承されていた称号は、ほとんど使われなくなったとはいえ、学位、軍階級に関する称号は日常生活の中で個人の名前と密着して、社会的に重要な役割を果たしている。称号の重要性をめぐって、初代大統領スカルノの執着ぶりが思い出される。かつて、スカルノは、革命を標榜して政権を担当した当初、国民との平等を強調し、「我が同志」に似た、ブン・カルノ（ブンは兄にたいする親愛の呼称）と呼ばれることを好んでいたが、終身大統領になった頃には、おびただしい数の称号を名前につけて呼ばせるようになっていた。

インドネシアで広く通用している称号は、身分、社会的宗教的地位を標示する一連の称号と、親族名称から転用され、対者呼称詞の働きをする称号の二つに大別できる。前者は、他者と関係なく、該当者個人のみを対象として付与されるのに対し、後者は人間関係の枠ぐみの中で当事者個人と相手との相対的関係に拘束される相互性をおびているという特質をもっている。

まず、身分、社会的宗教的地位を標示する称号から検討してみよう。この称号は、バリ社会におけるカーストを表わす称号とミナンカバウで結婚した男性に与えられる称号を除けば、概略次の四つに分類できる。

(1) 貴族の称号

R.(Raden), R.M.(Raden Mas), K.R.(Kajeng Raden)

K.R.M.(Kajeng Raden Mas) — (男性)

R.A.(Raden Ayu), (Raden Ajeng) — (女性)

以上、今もよく肩書に明示されるジャワの称号で、既婚か未婚か、年上か年下かの年齢の上下によって区別される。

R.M. Jono Hatmodjo のように、名前の前に略号で記載される。

(2) 宗教・アダット指導者の称号

イスラム教指導者のキアイ (Kiai), 聖地巡礼を終えた人に与えられるハジ (Haji), 牧師の称号ドミヌス (Dominus) など。略して次のように記載する。

K.H. Abdur Rozzaq Fakhruddin * K.(kiai) H.(haji)

その他、アダットを指導する Penghulu(ミナンカバウ)

Raja Bius(バタック) など、各地域で用いられる称号がある。

(3) 軍隊の階級

陸軍と警察軍は、用語が同じで、大將は Jenderal. 一方、海軍は Laksamana, 空軍は Marsekal と、それぞれ別の用語体系を持っている。二語で構成される階級は、Letjen.(Letnan Jenderal 中將) のように短縮した形で用いられる。また、必要に応じて、階級の後ろに警察軍 Pol.(polisi)、退役 pur/purn (purnawirawan) などの称号を伴う。

例 Jenderal Pol. (pur) Hoeng Iman Santoso (退役国警大將)

(4) 学位に関連する称号

この称号は、インドネシアでは重要な意味をもち、肩書として必ず明記される。全て省略形式で用いられる。教授 Prof. 博士 Dr. (医師は dr.) 学士: Ir. (理工)、 S.H. (法律)、 S.E. (経済) 修士: M.A. (文系)、 M.Sc. (理工)、 Drs. (男性)、 Dra. (女性)。このうち、Prof., Dr., Drs./Dra., Ir., は名前の前に、S.H., S.E., M.A., M.Sc. は名前の後に付き、Prof. + Dr + Ir/Drs(Dra) + 名前 + S.H./S.E./M.A./M.Sc. の順で記載され、学位以外の称号と併記す

る場合は、

軍階級 + 学位 + 貴族 + 宗教 + 名前 + 学位
の順序に従う。例えば、

Brigjen¹ (pur) Prof. Dr. RM.² H.³ Soelarko, S.H.

(¹ 准将 ² Raden Mas ³ Haji)

以上、見てきた称号は、(1)のように子孫に継承されるものと、そうでない非継承という継承性の違いがあるものの、いずれもその人自身に付与されたもので、容易に理解できる体系をもっている。ところが、インドネシアには、広く全域で使われている、特殊な様式をもった、広義の称号がある。それは、親族名称で相手を称する場合である。直接、血縁関係のない第三者に対し、Bapak (父)、Ibu (母)などの親族名称を用いて呼ぶ、いわゆる虚構的用法である。

さて、インドネシアでは、人を呼ぶ場合の一般的な呼び方に次のような様式がある。

(1) 名前のみで呼ぶ呼び捨て

ただし、この場合は、対象者との関係が目下か親しい間柄に限る

(2) 親族名称 + 名前

Bapak (父)、Ibu (母)、Kakak (兄/姉)などの親族関係を表わす名称を相手の名前の前につけて呼ぶ形式で、最も一般的である。普通 Pak, Bu, Kak などのように省略される。

(3) 親族名称 + 役職/身分などの称号

Pak Presiden (役職=大統領)、Pak Raden (貴族)、Pak Haji (宗教)、Pak Insinyur (Ir. 学位)、Pak Direktur (役職=社長)

ここで用いられている親族名称は、虚構的であるとはいえ、自分と対象者との関係が、目上であるか、目下であるか、心理的距離の遠近、性別の違いがどうであるかなどの条件によって、相互的にのみ規定される語彙で

ある。二者間が相互性を帯びている点が注目される。

いまひとつ、これらの親族名称の用法と関連して、呼び名の特殊な様式がある。すでに「名前の変更」で、バタックの呼び名で触れたが、子供を中心とした「父/母 + 子の名」の形式である。自分の子供(長子)を起点に、自己を同一化⁽⁵⁾させた呼び方で、バタックだけでなく、バリ、スダなどインドネシア全域で、広く見られる現象である。

(バリの例) Pan (父) /Men (母) + 長子の名

ところで、人がある対象に名を与える命名行為は、その対象を他の事物から区別し、全体の中で位置づける分類機能の働きを持つばかりでなく、その結果、命名された対象が持つ性質、特徴的な行動様式などの属性をも明示する。さらに、こうした単なる分類や属性付与の他に、命名行為には役割期待が加わる⁽⁶⁾。

この役割に注目して、バリ農村を調査したギアツは、子供ができることで変わる呼称形式の効用について、次のように指摘している。まず、夫婦は同一の一人の子を起点に「～の父」、「～の母」と呼ばれることで、所属村落の単なる構成員としてだけでなく、親族関係、祭礼にまつる集会、生活上必要なグループのメンバーとしての資格が付与され、社会的に切り離すことができない一組の人間と見なされる。第二に、「～の父」も孫ができれば、「～の祖父」へと呼称形式は移行する。「～の父」と呼ばれる男性は社会における諸活動で指導的役割をもつが、「～の祖父」に変わると、その人は一目置かれてはいるものの、実際の活動では、相談役的な機能を果たすに過ぎない。このように、子を起点に世代差を分けることで、それぞれの役割分担を明確にできる⁽⁷⁾。また、女性に対しては、こうした呼称様式は、子を持たない限り、子供時代と変わらないカースト名、あるいは出生順位を表わす名前ですっと呼ばれるため、その反動として、「子を持ちたい」とする強い願望を抱かせる強制力として働く。

以上、この呼び名の形式をとった称号は、きわめて重要な社会的意味を

もっている。

Ⅵ. おわりに

「..... もし差し支えなければ、あなたの姓を教えてくださいませんか」

「姓はありません」

「なぜご自分の姓を隠すのですか？」

「ないんです、ほんとうに」

「洗礼名は？」

「ありません」

「姓も洗礼名もないのに、高等学校の学生さんだなんて、どうしてそんなことがあり得ますか？まさか、あなた、プリブミだとおっしゃるんじゃないでしょうか？」

これは、インドネシア最高の国民文学『人間の大地』⁽⁸⁾(ブラムディヤ・アナンタトゥール作)の主人公ミンケとオランダ人医師とのやりとりである。ミンケはジャワ貴族の子弟であるがゆえにオランダ人学校で、高等教育を受ける機会が与えられる。しかし、そのすばらしいオランダ語による文学的才能にもかかわらず、「苗字すらもたない男です⁽⁹⁾」と同級生のオランダ人から侮辱される。オランダ植民地当時、たとえ貴族といえども、プリブミ(原住民)であることは、まさに非人間と見なされていたと言っても過言ではあるまい。苗字がないことは非人間の代名詞であった。

にもかかわらず、インドネシアは、三世紀にもおよぶオランダ植民地支配下にありながら、ミナハサ、マルクなどの一部キリスト教地域を除いて、姓をもつ命名制度を受け入れなかった。それは独立後の今日も続いている。姓をもつことが、文化の一形態であるとするれば、「姓」を受け入れなかったという点にこそ、インドネシア独自の文化的個性があるといえる。

インドネシアは宗教文化圏の分類で言えば、形式的には、イスラム圏に属するが、イスラム以前に形成されたジャワ・ヒンドゥー文化が根強く息

づいており、命名法に関しては、特に名前に用いられ語彙の中に、その影響力が強く反影している。構造的には、これまでに見てきたことから、インドネシア人の名前は、おおよそ、次の四つの型に分類できる。まず、姓ももたず、個人名だけの〔ジャワ型〕、独自のカースト名と出生順位名で構成される〔バリ型〕、次に、父系氏族〔マルガ〕を有する〔バタック型〕、そして、キリスト教化することでファミリー・ネームを定着させた〔ミナハサ型〕。なかでも、ジャワ型は、ジャワはもとより、スンダ、アチェ、ミナンカバウなど、その他多くの地域に、広範囲に分布している。その上、住民の数も一億を越え、圧倒的多数である。従って、ジャワ型は、インドネシアにおける命名法の主流であると言える。とはいえ、いろいろ異なる民族との結婚で、このような定型の境界線で、さらに多様な新しい命名様式が生まれていることも確かである。ただ、姓をつける命名法へ向かう傾向だけは、今後も現われては来ないであろうと思われる。

最後に、この小論を終えるに当たって、ストラマの北端のアチェから、東のハルマヘラに至る各地に住む多くのインドネシアの方々からアンケートによる調査でご協力いただいたこと、特に一橋大学大学院の留学生、ジュハナ氏から懇切なご教示をいただいたことを付記して、感謝の言葉としたい。

注)

- (1) 島村修治「世界の姓名」(講談社、昭和52年) p. 22-23
- (2) " APA DAN SIAPA sejumlah orang Indonesia 1983-1984" penerbit grafiti pers, 1984 .
- (3) Prof. Dr. Koentjaraningrat " Manusia dan Kebudayaan di Indonesia" , Penerbit Dajambatan 1971, p. 156-157
- (4) 前掲書 p. 349-350
- (5) 拙論「インドネシアにおける親族名称と親族呼称をめぐって」『アジア研究所紀要第12号』1985, p. 150

- (6) 日英語比較講座第5巻文化と社会『自称詞と対称詞の比較』(鈴木孝・夫)大修館 1982、 p. 53
- (7) Clifford Geertz “Sebuah Desa Bali” — Prof. Dr. Koentjaraningrat “Masyarakat Desa di Indonesia” , Univ. Indonesia, 1984, p. 256
- (8) プラムディヤ・アナンタ・トゥール 押川典昭訳「人間の大地(下)」めこん1986, p. 42
- (9) 前掲書 p. 61